



北方民族博物館だより

No.72



H1.8 毛糸製靴ひも
サミ フィンランド/ヴォツォ
全長 236.0cm ひも幅 2.9cm

サミの女性たちはトナカイの角や木でできた小さな織機で、毛糸を材料にして、ひもを作ってきた。

こうしたひもは、靴ひも、ベルト、ゆりかごのひも、バッグの取っ手など様々な場面で使われる。地域によって文様や使われる色が異なっている。

靴ひもとして使うときには、靴に結びつけ、靴の上部からふくらはぎに向かって、ゲートルのように重ねながらまいてゆく。

なお織機を使ってひもを作るのは、北の地域の伝統的な方法で、南の地域では指で編まれた。

- 1 表紙 毛糸製靴ひも
- 2 榎本武揚展
はくぶつかんクラブ/研究紀要第18号/ミニギャラリー
- 4-5 企画展「北方民族小物のおしゃれ」
- 6 INFORMATION

榎本武揚展

2008.12.6-12.18

主催 東京農業大学生物産業学部
北海道立北方民族博物館

本展示は榎本武揚没後100年と榎本緑の東京農業大学が生物産業学部（オホーツクキャンパス）を網走に開設して20周年を迎えるにあたり、榎本武揚を再評価し、また榎本が目指した北方開拓の精神がいかに受け継がれているかを展望しようと企画されました。展示企画は東京農業大学生物産業学部実学センターの黒瀧秀久教授を中心とした研究スタッフの方々があたられました。

榎本武揚は明治維新に際して幕府艦隊を率いて蝦夷地に向かい、幕臣政権樹立を意図しましたが新政府軍との箱館戦争に敗れ降伏します。一般的にはここまでの榎本の前半生はよく知られていますが、その後の榎本がヨーロッパ留学で得た科学技術、国際法などの知識をもとに新政府の要職を務め、日本の近代化に尽力した後半生については意外と知られていません。この間、榎本は北海道開拓や北方圏地域の開発に強い関心を寄せ、明治24年に創設した徳川育英農科はその後、東京農業大学へと発展し、さらに東京農業大学オホーツクキャンパスの設置は榎本の北方に対するフロンティア精神を引き継ぐものとされています。

展示内容は榎本の生涯を解説・紹介するパネル、写真、肖像画（コピー）、肖像写真、榎本銅像頭部原型、書（掛軸、扁額）、箱館戦記として知られる『麦叢録』付図、榎本の任官等にかかわる文書など約100点で構成され、とくに外交にかかわる訓令や全権委任状の原本や夫人多津の書簡、榎本の遺品（流星刀、愛用のパイプ）など榎本家所蔵の大変貴重な資料も展示されました。

また、榎本が記した『シベリア日記』とともに展示された榎本の伝記ないしは榎本を題材とした小説、榎本にかか



黒瀧秀久東京農業大学教授による展示解説

わる歴史書など関連書籍の多さから、榎本がいかに魅力に富んだ人物であるかがわかります。

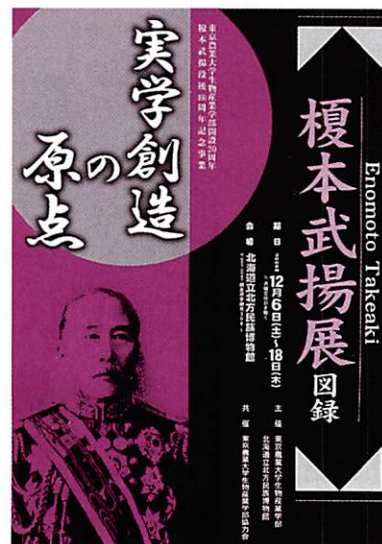
『シベリア日記』は榎本が1875（明治8）年の樺太・千島交換条約の交渉・調印のためにロシア・サンクトペテルブルグに渡り、1878（明治11）年7月にシベリア経由で帰国の途に着いた際の道中（主として馬車による）の記録で、日本人による最も古いシベリアの記録として知られています。この日記は榎本の死後発見され、南満州鉄道株式会社によって発刊されましたが、貴重な記録と再評価され、講談社学術文庫に収められています。

榎本の北方開拓の精神を実現するための取組みは戦前の樺太農場設置などを経て再びオホーツクキャンパスによって引き継がれています。現在進行しているさまざまな活動が多数のパネルで紹介されました。

なお、展示初日の12月6日には黒瀧教授による展示解説会が行われました。

会期中は多くの榎本ファンが参集され、短期間にもかかわらず400名近くの観覧者をむかえました。

（学芸グループ 渡部 裕）



榎本武揚展図録

はくぶつかんクラブ

『スノーシュー(かんじき)で
遊ぼう』

2009.1.21

北東シベリアから北アメリカのツンドラ帯や北方針葉樹林帯では、雪上を歩くのに便利な道具「かんじき」が使われてきました。かんじきには木枠に皮を網状に張るなど様々な形が知られています。

今回のはくぶつかんクラブでは、かんじきをはいて、博物館のまわりの誰も足を踏み入っていない雪原を歩き、そのあと北方民族博物館雪上カルタを楽しみました。



研究紀要第18号発行

B5判 全126頁

谷本一之「分配・分与」を支える手立て

フィリップ・ヴァルテール（渡邊浩司訳）「雁と熊：想像世界での系譜と宇宙創成神話」

高野孝子「大地とのつながりを求めて(1)：アラスカ州コディアック島での教育プログラムとアイデンティティの構築」

渡部 裕「カムチャツカの先住民文化をめぐるツーリズムの現状」

笹倉いる美「ウイльта文化聞き書きノート(3)：クマ送りに使われた首飾り」

角達之助「オホーツク文化堅穴住居址の柱穴について」

齋藤玲子「＜資料紹介＞北海道立北方民族博物館所蔵のイヌイトの版画について」

中田 篤「＜資料紹介＞北海道立北方民族博物館所蔵、ツァータンのシャマン衣装について」

笹倉いる美「のるりすと2008：北方研究データベース」

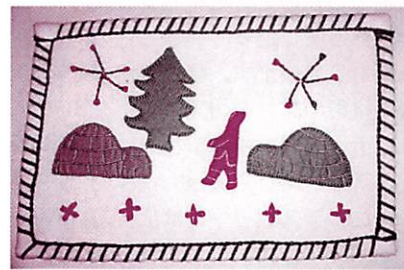
ミニギャラリー

岩崎昌子コレクション
イヌイトの小さな壁掛け

2008.12.6-2009.1.12

イヌイトの壁掛けは、女性たちに古くから伝えられてきた裁縫の技術を用いて、主にカナダ極北地方で作られています。防寒着の材料となるダッフル地に、様々な文様に切り抜いたフェルトがアップリケされ、さらに刺繍がほどこされます。多彩な色合いと、ぬくもり感のある素材が独特の印象を与えます。壁掛けは1960年代後半から作られるようになり、最近ではアートとして高い評価を得るようになってきました。

カナダ・トロント市在住の岩崎昌子さんのコレクションのなかから、クリスマスを題材にした小さな壁掛けを紹介しました。イヌイトの世界観には、万物に霊が存在すると考える《アニミズム》と、霊と交信する特別な能力をもつシャマンと呼ばれる人が預言や病氣治療を行ったりする《シャマニズム》という考え方がありましたが、1900年代以降にはキリスト教が急速に広まり、クリスマスの習慣も定着しています。



展示した壁掛けはすべてカナダ／エスキモーポイント（アルヴィアト）で作られた物

企画展

北方民族小物のおしゃれ small handicrafts in the north

2009.1.31-4.5

当館では、北方の環境に適応して暮らしてきた、北方民族の知恵や技術を紹介しています。

ところで、北方民族の資料をみると、環境適応それだけでは説明しきれないものがあることがわかります。例えば衣服には、寒さや風、雨などから身を守る役目もありますが、必ずしも自然環境だけが、どのようなものを身につけるのかの、選択の理由になっているわけではありません。

知恵や技術からは、機能美とよべる洗練された美しさをもったものがうみだされてきましたが、一方でこれほどに手間をかけて仕立てるのはどうしてなのかと思わされるものも数多くあり、社会や世界観、歴史や好みがあらわれています。

今回の企画展では当館所蔵の服飾小物を中心に、「おしゃれ」をキーワードにして、北方民族文化の一端を紹介することを意図しました。なかでもロシアのコリヤークの資料と、北欧のサミの資料を多く展示しました。

装飾の技

北方民族が服飾小物に使った素材はなんといっても皮です。毛皮も毛をとりのぞいた革もよく使われています。異なる動物の毛皮を配したり、異なる色の毛皮を市松状に縫い合わせたりもしています。縫い代がほとんどない場合もあり、縫製の技術の高さを物語っています。

皮のように手に入れやすい素材のほか、交易や商品の流通のなかで、新しい素材や文様も積極的に取り入れられてきました。特にガラス製ビーズは広く受け入れられた装飾用の素材です。

鳥の羽軸やヤマアラシの「とげ」を使ってベルトなどを装飾していた北米インディアンの間では、「とげ」がビーズに置き換わりました。アイヌの間では直径1cmを超える中型～大型のビーズが好まれ、主に首飾りとされました。コリヤークでは、ビーズは円く切った皮に刺繍されることが多く（写真）、刺繍された皮が、衣服や帽子に縫いつけられました。

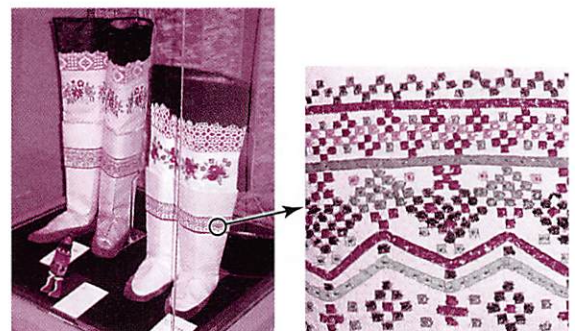


靴

北方民族の間で作られる人形は、例外なく立派な靴をはいています。それだけ靴が重要であるということでしょう。

靴にはひっかけて履く草履（ぞうり）型、足を包み込むモカシン型、ブーツ型等がありました。モカシン型はユーラシア大陸でもアメリカ大陸でもみられます。北米インディアンの間ではヘラジカの皮がよく使われ、甲の部分に刺繍されることもあります。ブーツ型の靴は筒の部分と底の部分が別で作られたものがあります。トナカイの毛皮をよく使う地域でも靴底にはより丈夫なアザラシの皮が好まれました。

グリーンランドの女性用のブーツ（写真）には、レース飾りや花柄の刺繍といった西洋の影響が色濃くでています。クロスステッチを模したのではと思われる部分は、1mmほどの皮片を縫いつけて表しています。



かぶりもの

かぶりものには、頭頂部だけを覆うものや、耳まですっぽり覆うもの、額を飾るもの等があります。シャマンとよばれる霊能者用、あるいはダンスをするときにかぶるといような用途別のもものもあります。コリヤークでは冬用は毛皮を二重にし、耳の形にした毛皮が縫いつけられることもありました。

同じ民族でも地域によって形が異なる場合があります。サミの場合、男性用帽子には四つの角があり、中に羽毛などをいれて形を整えることができるものや、毛糸の大きなポンポンが付いたもの、ひさしのついた形のものもあります。

服にフードがついている地域では、フードが帽子代わりになることが多いようです。

かばん

かばんを紹介するコーナーでは、素材の異なるものを集めて紹介しました。トナカイやアザラシの毛皮やなめし革のほか、腸や心臓などの内臓、鳥のみずかき、植物の繊維、最近ではナイロン製の漁網など、多種多様なものが素材として使われています。



手袋

手袋は、二またの「ミトン」と、五本指のものが多く使われています。素材には同じく動物の毛皮やなめし革が多く使われました。甲の部分にはよく装飾がほどこされましたし、親指の腹側も装飾のポイントになっています。

北欧では古くから編み物がさかんでしたが、よく知られている編み込み模様のはいった手袋は、サミに起源があるとも言われています。



サミの手袋

スカーフ

ロシア・ソビエト連邦に組み入れられた地域では、先住民女性の多くがロシア人の影響を受けて、スカーフを利用するようになりました。

サミの女性の正装に欠かせないのが絹製のスカーフです。銀製のブローチで前の部分を留めます。絹製スカーフに、絹糸を編みながら房をつけてゆくのもサミの工芸のひとつです。

男のおしゃれ

北方民族の男性は、場合によっては女性よりもおしゃれな小物を身に着けています。日本では女性ものとされがちな花の図柄が男性用小物にほどこされている場合もありますし、例えばライフルを入れる袋やタバコの葉を入れるケースにビーズ刺繍がされているなど、文様に対する民族独特の価値観の違いも見取れます。こうした男性のおしゃれは、女性の配慮や技術に支えられています。

体験メニュー

体験メニューは三種類提供しました。

コリヤークの衣服の文様をつかっけての、「オリジナルはがき」づくり、サミのひも編み、モンゴルの衣服体験です。

コリヤークの衣服のなかには木を彫ってスタンプを作り、植物の汁をつけ文様をほどこしたものがあります。この文様を、はがきに押ししてみようというものです。

サミの手袋の先などについている細いひもには何通りもの編み方がありますが、そのなかでは易しい4本編みを紹介しました。

おしゃれ投票

展示会場では、「展示資料のなかで一番おしゃれだと思った資料は何で、その理由は？」という投票を行いました。

よくきかれたのが、色彩の豊かさについての感想です。自然な毛皮の色のコントラストや、刺繍のあざやかさや配色に賛辞がよせられました。北方民族のデザインを今の自分たちの生活にとりいれることができる、また、思い入れや手間を惜しまぬ心におしゃれ心を感じられたかたもいらっしゃいました。



下段左から二つめの帽子がおしゃれ投票No.1 (2月末現在)

なお関連事業として、2月1日[日]に「解説会」、2月27日[金]に「ウイльтаのミニチュア靴づくり」(写真)を開催し、3月14日[土]に「講演会&講習会 刺繍が伝えるアイヌの心～アイヌ刺繍入門」、3月21日[土]に「はくぶつかんクラブサミのひも織り」を予定しています。

(学芸グループ 笹倉いる美)



平成21年度の主なもよおし

◆ロビー展『マンモスってどんな動物？』

平成21年4月11日[土]～5月24日[日]
意外に知られていないマンモスの生態や生息していた頃の環境、人間との関わりなどを、実物大のマンモス模型とともに紹介します。

◆第24回特別展

『千島列島に生きる：アイヌと日露交流の記憶』
平成21年7月18日[土]～10月18日[日]
環北太平洋の文化シリーズの4回目として、オホーツク海沿岸地域、特に千島列島に居住してきたアイヌの海洋資源の利用と、この地域に進出してきた日本やロシアとの交易や交流の歴史について紹介します。

◆第24回北方民族文化シンポジウム

平成21年10月17日[土]、18日[日]
「現代社会と先住民文化：観光、芸術から考える」

◆企画展『カムチャツカ先住民調査の10年』

平成21年10月31日[土]～12月13日[日]
当館学芸員による1997年以来9次にわたるカムチャツカ調査の状況と成果を、映像資料を中心に実物資料も交えて紹介します。

◆企画展『カナダの民話をみる：極北のイヌイト・アートを中心に』

平成22年2月6日[土]～4月11日[日]
カナダ先住民の間に伝承されてきた物語を表現した彫刻、版画、仮面などの資料を通して、その世界観を紹介。特に、アートとして評価も高いイヌイトの作品を展示し、現代の生活等にもふれます。

INFORMATION

■学芸員実習

◆1月27日[火]から2月1日[日]の日程で、学芸員実習生2名を受入しました。

■ロビーコンサート

12月19日[金]に札幌交響楽団員による「ロビーコンサート2008 青少年のための室内楽の夕べ」を、財団法人山田記念青少年育成財団との共催で開催しました。今回のメンバーはバイオリン、ピオラ、チェロ、オーボエ奏者でした。

演奏曲目はモーツァルトの「オーボエ四重奏曲」、シューベルトの「弦楽三重奏曲」、「この道」等で、「ふるさと」では会場のみなさんも一緒に合唱しました。



■行事報告

◆12月20日[土]にはくぶつかんクラブ「フェルトでつくるクリスマスのオーナメント（飾り）」を開催しました。



◆1月10日[土]にはくぶつかんクラブ「北方風オリジナルキーホルダーをつくろう」を開催しました。



■モニター会議

◆2月25日[水]に平成20年度第2回モニター会議を開催しました。



北方民族博物館だより No. 72

平成21(2009)年3月19日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
電話 0152-45-3888 fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org
指定管理者
財団法人北方文化振興協会